



奄美大島歴史深訪 (3)

— 為家と琉球王国、そして筆者と為家との関係 —

広島文化学園大学看護学研究科 特任教授
佐々木 秀美

■ はじめに

為家とは奄美大島の笠利家・田畑家・龍家の事を言い、源為朝（1139-1170）の嫡流と言われる家の称号である¹⁾。筆者、佐々木秀美の母方の祖母の名前は龍芋千代という。芋千代の戸籍謄本によれば、生地は龍郷村である。龍郷の龍家と言え、奄美大島有数の名家であり、流罪となった西郷隆盛（1828-1877）を預かったとして、その妻愛加奈（1837-1902）との関係も含めNHKの大河ドラマにもなった。興味深いことであるが、戸籍に登録されている三代前の方々はいずれも龍姓もしくは竜姓であるが、竜郷のいわゆる龍家との関係性が見出だせないでいた。龍芋千代の戸籍謄本によれば、住所は大島郡龍郷村127番、戸主は龍茂太郎（1868- ）、芋千代（1872-不詳）の父は叔父佐徳、母は赤場（1849-不詳）、赤場の父親は佐元で赤場は佐元の二女、茂太郎の前戸主は父親の龍佐宣（1841-不詳）、母は龍佐運の5女アグリ（1844-不詳）である。茂太郎は戸主として、叔父佐徳の妻赤場、そしてその娘芋千代を入籍すると同時に、自身の兄弟や、祖父佐富の5女大廣（叔母）、芋千代の兄弟（次男・二女除く）すべての入籍手続きを担っている。戸主茂太郎の叔父という事であるならば、茂太郎の両親のいずれかの兄弟が芋千代の父親の佐徳という事になろうか。登場したほぼ全員が龍姓であるから分らない。どんな家族形態なのか、姻戚結婚ありか？点と線はまだつながらないが、大家族であることは確かである。

先ず、奄美大島歴史深訪報告としては、『平家落人と源為朝伝説の島—奄美大島歴史深訪（1）』²⁾では、主として源為朝と平家伝説についてゆかりのある神社深訪から論じ、次の『奄美大島歴史深訪（2）—島民を苦悩させたサトウキビと家人（ヤンチュ）制度、そしてケンムン伝説—』³⁾では、奄美大島歴史概要に始まり、三味線の由来探求、そして島唄（奄美民謡）から、薩摩藩統制時代の厳しい奄美の島民の苦悩について論じた。そうした中で、幾分整理しておかねばならないのが、三味線文化と琉球王国、そして琉球王国と為朝との関係、そして琉球王国支配時代の奄美大島、そして笠利家から田畑、龍家へと変遷する1000年の時代である。その中で、日本の最果ての地で繰り広げられた様々な歴史的事実、これはいまさらながらではあるが、誰もが知っている？あるいは一部は知っている？いやしかし、私が知らなかったかもしれない事への歴史的探求の始まりであった。

奄美大島の歴史について、『奄美史の一断面 奄美笠利氏の系譜』⁴⁾の著者、笠利水也氏（1914- ）は奄美大島龍郷町生まれの雑誌記者、ご本人は自身の名前の由来が、田畑姓なる前の笠利家と何か繋がりがあるのではないかと考えて調査を開始したようであるが、戸籍上、つながる資料が見つからないとか。『奄美の暮らしと儀礼』⁵⁾、『奄美・沖縄女のこゝろ』⁶⁾の著者、田畑千秋氏（1952-）は、民族学者であり、大学教授、そして、本人は東京生まれであるが、田畑の姓が示すがごとく、奄美大島の田畑家の血筋、元練馬区長の田畑健介氏（1921-1989）は、千秋氏の叔父にあたる。そして健介氏は次男家第19代龍為寧

連絡先：佐々木 秀美

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3

E-mail: hidemi@hbg.ac.jp

(子佐富)の孫として系図にその名前が示されているから、千秋氏もその系図の中の一人であろう⁷⁾。次に、『明治維新のカギは奄美の砂糖にあり、薩摩藩隠された金脈』⁸⁾の著者、大江修三氏(1938-)は、東京理科大学教授で工学博士である。大江氏は文化・民俗学的観点の方ではないが、龍家本家21代田畑為正の娘の子供、つまりは孫にあたる。為正は京都大学薬理学卒業後に貿易会社勤務と記載されている。という事で、笠利家や田畑・龍家の末裔の方々の積み重ねた努力によって史実が明らかになっていることに加え、WEB上⁹⁾等でも系図が説明されているから過去へ遡るのは容易である。ここまでで私事は終わるはずであったが、しかし、思いがけないところで点と線がつながった。それは、大江氏の著作『明治維新のカギは奄美の砂糖にあり、薩摩藩隠された金脈』の中に「田畑家と牧家の争い」¹⁰⁾の登場人物が、先述した芋千代の戸籍謄本に掲載された人物たちであったからである。衝撃の発見であった。

そこで、大江氏の著作を手掛かりにしながらも、大江氏の示した「田畑家と牧家の争い」は1855年であり、当主田畑為勝(佐文仁1778-1852)の逝去は1852年(嘉永5年)、長男龍為膳(佐運1808-1846)の没年は1846年(弘化3年)である。それでは事件が起きた1855年(安政2年)に切腹後の事後処理をしたとされる両者は生存していないことになる。ゆえに改めて、母方の祖母芋千代とその先祖であろう者たちの系譜を探るために国会図書館に所蔵されている『奄美郷土研究会会報』にその根拠を探索した^{11), 12), 13), 14), 15), 16), 17), 18)}。そこで本論では、検索結果を源にしながら、先述した戸籍謄本に記載された人物たちと、事件に関わった人物たちを検証しながら、筆者と龍家との関係(図1)、そして笠利家と田畑家(図9)、そして笠利家と琉球王国(図13)、までの系図を作成しつつ、為朝から龍家までのおよそ1000年の時を経て現在に至る過程について検証したので報告する。

1. 田畑家と牧家との争いで発見した筆者のルーツ

大江氏の著作及び田畑氏家譜の解説¹⁹⁾に記述された田畑家と牧家の争いに登場した人物達は、筆者に強い衝撃を与えると同時に絡み合った糸がほぐれる明快な得心であった。一度、斜め読みをして飛ばしていたところでもあったが、再度、読み直すと事件の人物の中心人物に龍佐元がいた。佐元?どこかで見た名前である。もう一度読み直すと第17代田畑為勝の次男佐元とある。そこでもう一度、芋千代の戸籍謄本を見直した。謄本によれば、芋千代の父は龍佐徳、母は龍赤場、赤場の父親が佐元である。戸主は龍茂太郎で叔父佐徳と妻赤場の娘として芋千代の名前が記載されている。茂太郎の父は前戸主の龍佐宣、母は田畑アグリ、アグリの父親は佐雲である。ほぼ全員が龍家である。この戸籍上の繋がりを下記の関係図(図1)にまとめた。著作は田畑家と牧家の争いの顛末が詳しく述べられていた。まさに青天のへきれきであった。この衝撃の事実が今まで、他人事であった龍家と筆者との関係を明白にした。点線の四角で示したところが佐元から筆者までの系図である。図中央が本家、右側が分家次男家、その右側が分家三男家の系図である。

先ず、中央黒太字点線枠内、17代本家田畑為勝(佐文仁1778-1858)の次男龍為時(佐元1811-1855)が、争いの中心人物である。佐元から下方に行くと娘の二女龍赤場(1849-不詳)、赤場の長女龍芋千代(1872-1937)、そして芋千代の三女千代(1908-1995)、そして千代の娘が秀美(1947-)である。

次に、本家17代田畑為勝(佐文仁)の実弟、龍為富(親佐富)が次男家分家第18代の家督を相続、第19代の家督を相続した龍為寧(子佐富)、次男家分家第20代の家督を相続したのが龍為宣(佐宣(1841-不詳)であり、佐宣は本家18代龍為膳(佐運(1808-1857)の五女のアグリ(1844-不詳)と結婚、佐宣の弟龍為泰(佐徳)と佐元の娘、赤場が結婚するという従兄妹同志の結婚である。佐徳と赤場の娘長女芋千代が筆者の祖母であり、次男家分家第21代の家督を相続した龍為林(茂太郎1868-不詳)が叔父佐徳一家である赤場や芋千代他の入籍を担った。

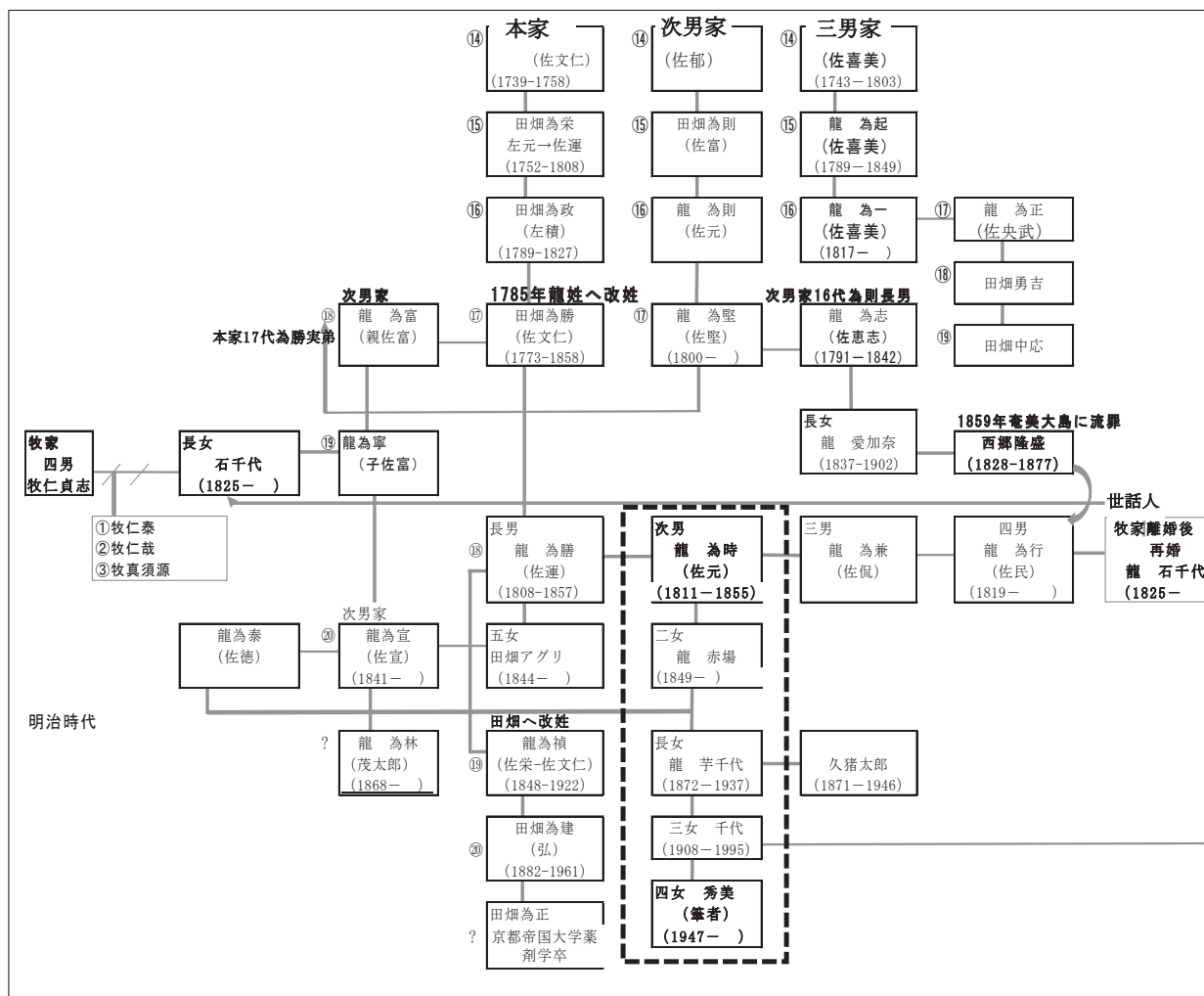


図 1 龍家一族と秀美(筆者)迄の関係図

又、前戸主龍左宣の長男茂太郎の祖父は佐富とあることから、次男家第18代龍為富（親佐富）、19代龍為寧（子佐富）の長男20代龍為宣（佐宣）、21代茂太郎へ継承されたことがわかる。茂太郎が戸籍上、叔父佐徳と記してあるのは次男家20代佐宣の弟為泰（佐徳）であり、赤場の結婚相手である。赤場は佐元の娘の一人であり、筆者の祖母にあたる。尚、戸籍上、アグリのみが田畑姓になっているが、本論では、田畑家が龍姓に改姓した1785年を起点にそれ以降に生まれた人物名は龍姓とした。

先ず本家である。絶対的な権力を有した17代田畑為勝（佐文仁1778-1858）は、1785年（天明5年）に田畑姓から龍姓に変わった。龍姓への改正は薩摩藩第21代島津重豪（1745-1832）の時代である。それは差別化を目的とした政策により一字姓への改姓が強いられたことによる。薩摩藩は、田畑氏の本拠地であった龍郷の一字をとって龍（りゅう）に改姓させた。

為勝の長男為膳（佐運）が18代の家督を継いだ。しかし、彼は弟、佐元の事件後、1857年（安政5年）に流行り病で死亡した。父為勝より1年前早い死亡であった。為勝の死後、19代が決定するまで空白の期間があった。1859年（安政6年）、西郷が奄美に流罪になった時は為勝逝去後であった。そこで、相続代理人として西郷の世話をしたのは四男の龍為行（佐民 1819-不詳）と後妻となった石千代（1825-不詳）である。石千代は、第18代龍為富（親佐富）の長女であり、牧家に嫁いでいた。田畑氏の解説²⁰⁾ および牧家系図²¹⁾ によれば、次項で述べる龍家と牧家の争いによって離縁された石千代は、牧家に牧仁泰、牧仁哉、牧真須源の3人の息子を残したが、それぞれ、牧家で順調に成長したようである。更に再婚した佐民と石千代の間にも女子が二人生まれている。その中の一人が折鶴（1862-1928）であり、本論で多数、参考にした論文の著者田畑勇弘氏（1907-不詳）の母親である。従って、勇弘氏は佐元の弟で四男の為行

の孫にあたり、本家系図の一人としてその名前が記載されると同時に、自身の『笠利氏家譜の解説』²²⁾にも説明されている。その後、本家19代は龍為禎（佐栄 1848-1922）が家督を継ぎ、20代は田畑為建（弘 1882-1961）、21代は田畑為正であり、大江氏の祖父にあたる。武士社会が終焉を迎え、新たな戸籍制度が導入されたと考えられ、21代からは又田畑姓を名乗っている。龍郷の本家跡地は空き地になっていたが、昨年11月に筆者が訪問した時には公園にするとかで工事が進められていた。

次に次男家である。次男家16代龍為則（佐元）の次は次男の龍為堅（佐堅1800-不詳）が17代を相続した。長男龍為志（佐恵志1791-1842）は、親の介護とかで家督を継いでいない。しかし、田畑氏の解説²³⁾によれば、為志（佐恵志）は17代為堅（佐堅）の異母兄であり、家督を継がなかった理由は住用村出身の生母を介抱する為としているが、それは表面上のことであり、実際は、妾腹の子であり、庶子であったためのものである。次男家を相続しなかった為志の娘が田畑愛加奈（1837-1902）であり、西郷隆盛の妻となった人物である。彼らの間にも二人の子供がいる。長男は西郷菊次郎（1861-1928）と言い、政治家である。妹の方は西郷菊草（1862-1910）という。彼女は陸軍大臣大山巖（1842-1916）の実弟大山誠之助（1850-1915）と婚姻した。

昨年、筆者の帰郷時に祖母芋千代の戸籍謄本に示された次男家の住所を訪問してみたが、その地には他の人が居住していた。その家に居住しているという高齢の女性に話を聞いたところ、その前の龍家については知らないという。茂太郎が世をすねた結果であろうが、少々寂しい気がした。1868年に明治と年号が変わってから、150年以上が経過しているのだ。しかし、著者の実家の家は160年以上も家の原型を保って建ち続けていたのだから、余りにも早い終焉だ。高齢の女性が愛加奈の家と田畑家のお墓の場所を教えてくれたので訪問した。やたらと新しい龍と書かれた門扉（図2）をくぐると、筆者が学童期の頃に訪れたその家があった（図3）。西郷が愛加奈の為に建てた茅葺の家である。庭は良く整備されているが、以前、小学生の頃に訪問した時より全体的に狭い。確か縁側に西郷によく似た人物が胡坐をかいて座っていた記憶がある。愛加奈の甥の孫だという高齢の男性が入場料を取って説明を加えている。室内（図4）は二間あるが、いずれも狭い。展示されているのは西郷や愛加奈の写真、他、西郷の直筆の書である。家の右側に勝海舟（勝安芳1823-1899）の碑文が刻まれた記念碑がある（図5）。記念碑の碑文にある記名の勝安芳は勝海舟の事である。碑文の内容は幕末の政治家勝海舟が島民の求めに応じてその記念碑に寄せた言葉である。1896年（明治29年）、大島島司（市庁長）であった笹森儀介氏（1845-1915）が大島に南洲翁（西郷隆盛）の遺跡に記念碑がないことを憂い、広く大島島民から喜捨を集めて記念碑設立を企画した。その折に当時、まだ存命であった幕末の政治家で西郷とも深く関わっていた勝に碑文を依頼し実現に至ったものである。



図2 門扉



図3 西郷隆盛が愛加奈の為に建てた家



図4 その室内



図5 西郷の記念碑に刻まれた勝海舟の碑文

碑文

天の此の人に 大任を下さむとするや、まず其しん志をむるしめ其身を窮乏すと、まことなる哉此言や唯友人西郷氏に於て是を見る。今年君の謫居せられし旧所に碑石を設くるの拳あり。島民我が一言を需(もと)む。我卒然としてこれを誌し以てこれに应ず。
明治二十九年晩夏 勝安芳
現地配布パンフレットより



図6 愛加奈の墓

記念碑の印字がかすれてよく読めないが、現地配布のパンフレットには以下のように記述されている。「碑文 天の此の人に 大任を下さむとするや、まず其しん志をむるしめ其身を窮乏すと、まことなる哉此言や唯友人西郷氏に於て是を見る。今年君の謫居せられし旧所に碑石を設くるの拳あり。島民我が一言を需(もと)む。我卒然としてこれを誌し以てこれに应ず。

明治二十九年晩夏 勝安芳」

学のない筆者には内容が理解できないが、恐らく、天が与えた大任を实行しようとした時にその身が著しく困難に遭った。その言葉はまさに友人西郷氏の人生に与えられた悲哀であるとも解釈できるだろうか。明治維新の立役者である西郷の高邁な思想とその実現に向けた困難は歴史上、多くの者に感動と尊敬の念を与える。成立した維新政府内における思想・信条の相違は争いを招き、失望した西郷が鹿児島島の地に帰った後に引き起こされた西南戦争と西郷の切腹で幕引きになった事件は歴史上有名な史実である。田畑家専用(辨財天ブジテン)の墓の敷地内に愛加奈の墓がある(図6)。

西郷ゆかりの建造物として次なるは南洲神社がある。この神社は龍郷の地ではなく芦花部にある。芦花部の南洲神社は身近な場所であったが、なぜか西郷がその地に1か月留まったことがあると聞いたことがあったが、疑問を残したままであった。南洲と言えば西郷であり、その御祭神も西郷である。南洲神社と言え、鹿児島市に設置されていることで有名である。南洲神社は、西南戦争で犠牲になった者達の遺骨を埋葬した跡地に霊を弔うために設置された。西南戦争は1877年(明治10年)に勃発した士族による反乱である。



図7 南洲神社(芦花部)



図8 南洲神社設立由来

名瀬有良に設立されている厳島神社は、三男家分家の12代田畑為遠(佐喜美)の設立であることが判明したのは奄美史研究に着手してからであった^{24), 25)}。この厳島神社が設立されたのは1718年(享保3年)

のことであったが、佐喜美は開拓・開墾した芦花部の地にも石祠を設置し、毎年豊作祈願をした。その場所に南洲神社は設立されたとのことであった。広島県にある厳島神社は平家ゆかりの神社であり、歴史的にも古い。同じ名前である有良の厳島神社も平家ゆかりの神社であり、難破してその地にたどり着いた平家ゆかりの者が設置したのではないかとずっと考えていた。ゆえに厳島神社より歴史は浅いと単純に考えたものだ。筆者らは小学生の頃、誠につまらないことで自慢し合ったり、けんかを仕掛けたりしたもので、“芦花部には南洲神社があるから偉いんだ！”等と自慢していた芦花部出身の同級生等に対し、“厳島神社は由緒があってもっとすごい！”と応戦したものである。この二つの神社が何故、芦花部と有良に設立されたのかはずっと疑問を残したものであった。

芦花部の南洲神社は、1940年（昭和15年）に鹿児島市にある南洲神社からご神体分霊を行い、1941年（昭和16年）に地鎮祭・連座祭・鎮座祭を行った。その後、浦實（ウラザネ）という島役人が改築して守護神を祀ったとのことである²⁶⁾。南洲神社境内の看板（図7）には、西郷が愛加奈との関係で芦花部地域に1か月ほど滞在していたと書かれている。しかし、その関係は如何なるものかはわかっていない。ただ、求哲次の『奄美シマジマ（村々）の暮らし—名瀬市有良を中心に—』²⁷⁾には、西郷の芦花部での逸話が記述されている。それによれば、釣りの好きな西郷が芦花部出身の伴を連れて良く芦花部迄行っていたようである。西郷のお気に入りの書生に岡江一郎なる若者がいたそうである。西郷の伴とは恐らくこの岡江であろう。彼は竜郷の岡江仁与覇（ニホヘ）の妾腹で生母は芦花部出身であった²⁸⁾。ちなみにこの岡江一郎という人物は田畑勇弘の父方の祖母の弟であることから幾分か親戚関係にあるようだ。

『奄美シマジマ（村々）の暮らし—名瀬市有良を中心に—』²⁹⁾によれば、釣りの好きな西郷が芦花部出身の伴（恐らく岡江一郎）を連れてその帰り道で鯨見物の人だけに出会った。芦花部の浜に鯨があがったのだ。彼らは番所の役人が来るのを待っているという。日暮れ時で鯨の処理問題で難しくなることから、西郷は“自分が責任を取る”と言って鯨の背中に乗って肉を切り始めた。遅れてきた役人は西郷翁の判断であればと言ってその行為を認め、肉を持ち帰ったとのことであった。以降、この浜の事を“鯨浜”と呼んでいるようだ³⁰⁾。後に起きた血なまぐさい闘いを考えるとほのぼのとした話である。

少々、寄り道が長くなったが、次の18代の家督は、本家17代田畑為勝の実弟龍為富（親佐富）が相続した。18代、19代共に佐富であることから18代を通称親佐富と言い、19代を子佐富と称した。19代龍為寧（子佐富）を経由して20代を長男龍為膳（佐宣）が相続した。次の21代を相続したのが茂太郎であり、芋千代の戸籍謄本にある戸主である。彼は世を勘ね、妻を娶らず、子をなさず、彼以降、次男家は断絶したと記載される³¹⁾。しかし、18代為富は、本家17代為勝の実弟であり、直接的には分家の者ではない。そこには分家の家督継承に関わる何らかの事情あるいは、本家との力関係が微妙に絡み合っている事ではないかと考えられるが、本家と次男分家・三男家分家は相互に姻戚関係となりながら、その系統を存続させている。ちなみに佐徳の三男で芋千代の弟茂一郎（1891-1947）は、1914年（大正3年）、婚姻後、分家して田畑姓を名乗り、芋千代が嫁いだ名瀬有良に戸籍を移している。本来の次男家龍為堅（佐堅）の次世代も存続したと思うが、系図には記載されず、茂太郎が最後である。ちなみに元練馬区長の田畑健介氏は、次男家第19代 龍為寧（子佐富）の孫の位置で系図にその名前が示されている³²⁾から茂太郎や芋千代とは従兄弟同志になろうか。

最後に三男家である。三男家の12代は田畑為遠（佐喜美 1684-1750）である。佐喜美が開墾に尽力した地は有良・芦花部地域であり、『平家落人と源為朝伝説の島—奄美大島歴史深訪（1）』³³⁾で報告した厳島神社を設立した人物である。佐喜美には子がなく、次男家田畑為輝（佐富1733-不詳）の次男を養子とし、13代の家督を相続させた。名は田畑為真（佐喜美）という。14代は龍為真（佐喜美1743-1803）が相続、この時より龍姓に変更した。15代は養子の龍為起（佐喜美1789-1849）で妻は本家17代為勝の娘である。16代は為起の長男龍为一（佐喜美1817-不詳）が相続、17代は龍为正（佐央武）、18代は龍勇吉、19代は龍忠王であり、ここで記録は終わっている³⁴⁾。しかし、龍家の末裔ではあるが、長いこと知らずにいた筆者の様に本家、次男家分家、三男家分家それぞれに子女がいて大きな木の枝の様に分かれた者達の存在がある。彼らも私同様、今日まで何も知らないで、着々とその血を流を保ちながら、日本のどこかで活躍しているはずである。

2. 筆者と田畑家を結び付けた田畑家と牧家の争い

さて、冒頭に書いた大江氏が著作で紹介した田畑家と牧家の争い！それは牧家の兄弟による佐元への暴力事件であった。けんかの相手方牧家も、奄美士族の者達である³⁵⁾から士族同士の争いであった。大江が示した田畑家系図³⁶⁾に齟齬はあると判断した筆者は、亀井氏の『奄美郷土研究会報十九号』³⁷⁾を、改めて国会図書館で閲覧し、作成したのが図1.9である。ちなみに田畑氏の報告書では竜姓になっているが、本論では戸籍謄本と同じ龍姓を使う事とする。

争いにおける主な登場人物は、龍家関係では、17代田畑為勝、為勝長男龍佐運、次男龍佐元、為勝の弟で分家の18代を相続した龍佐富、佐富の長女石千代、そして相手方は石千代の嫁入り先の牧家である。争いの相手は牧家の長男（仁貞志）と次男（増英）である。

さて、佐元であるが、彼は15歳で勉学の為に父親の為勝と共に鹿児島に行き、22歳で謄本通事与人格（中国語の通訳官）になった、いわゆる武人というより文人であった。奄美大島に帰り、久場村と阿丹埼の間に分家が認められ、米10石（貨幣価値は藩によって相違があるようだが、約270万～350万円位？）が付与されていた。この金額は年間なのか月単位なのかかわからないが年間であれば現在の新入社員より少なく、月単位であるならば相当な高額収入である。

余談ではあるが1石は30俵、1俵は30kg、1kgは7合、という事であるから、現在、1俵が1万円位で売れるとしたら、計算上、10石の半分の5石程度は換金することができたと考えられ、経済的にも豊かではないが、比較的安定した環境の中で6人の子女を育てられるであろう。けんかの原因は書かれていない。けんかした場所は久場浜と書かれている。久場浜は久場村に隣接しており、久場村は牧家所有の土地がある。佐元が分家して付与された場所は久場村と阿丹埼の間にあった。阿丹埼は、西郷が奄美大島に上陸した最初の場所であり、薩摩藩の船着き場のあったところである。龍為行（佐民）が最初に準備した西郷の屋敷跡もその近くにある。土地の境界の問題でも生じたのか？推測に過ぎない。佐元は士族ではあったが、牧家の二人に見事にけんかで負けて帰宅した。

両目が失明するほどに殴られた息子佐元を見た17代当主為勝は、わが子の屈辱を見て大いに怒り、佐元を家に入れず、何故かその場で切腹を命じた。為勝は龍家の棟梁として剛直な人物であり、誰からもあがめられる人物であった。急な知らせで親戚が集まり、為勝を制しようとしたが、武士の面目が立たないと承知せず、結局、武士の慣わし通り、佐元の切腹の為の準備が整い、佐元は覚悟を見よ！とばかりに切腹して果てた。この時、筆者の祖祖母にあたる佐元の娘赤場はわずか6歳、父親の死をどのように受け止めたのか？赤場の心情やいかばかりかと考えると、まるで赤場がわが子の様に愛おしく、切なく感じられた。そして享年44歳であった佐元、遠い存在であった佐元がまるでわが父の様に切なく胸が痛い。

奉行所という今日の警察の役割を果たす役所もあったわけで、戸主とは言え、自分の子に切腹を言い渡すは筆者にしてみれば父親の暴挙であり、無情である。兄の佐運は当時、奄美大島近海に出没していた異民族船の取り締まりで遠方にいた。彼が知らせを受けて勤め先から現地に到着した時には、既に佐元は切腹をした後であった。その後、父親の為勝と長男佐運（佐元の兄）両名は、直ちに代官所に行き、仇討ち赦免状を手にした。龍家一族郎党は鎧兜に身をかためた戦闘状態で、数隻の船で久場浜に乗り付け久場浜を囲み、牧家に使者を送った。夜になっても篝火を焚いて夜通し、牧家にけんか相手を出すよう詰め寄った。あたり一面はこの様子を聞きつけた黒山のような群衆で一杯になった。牧家では龍家のあまりの勢いに圧倒されたか、実際の加害者は長男（仁貞志）と次男（増英）であったが、龍家の石千代が嫁いでいた四男の牧仁貞志（不詳-1855）に向かって身代わりを命じたという。牧家系図³⁸⁾によれば身代わりになった仁貞志は当時、27歳、兄の要求を直ちに受け入れたとは考えにくい、残される子供たちは立派に育てるとの約束を受け入れて自刃して果てた。しかし、自身の力だけでは自刃できず、代官所の役人が介錯したとか。この仁貞志の妻、石千代は、本家17代為勝の弟で次男家分家18代の為富（佐富）の長女である。

牧家系図上、この石千代は親佐富の五女仁千代となっている。為勝は石千代を龍家に引き取り、自身の四男龍為行（佐民）に嫁がせた。従妹同士の結婚である。為行（佐民）はこの時、先妻を失って妻がいなかった。この為行（佐民）こそが、奄美大島に流刑になった西郷の世話人である。西郷が奄美の龍

家に預けられたのは1859年（安政6年）である³⁹⁾。本家18代の家督を継いだ龍為膳（佐運）は弟佐元の切腹後の1857年（安政4年）に流行り病でこの世を去った。西郷が流刑になった年には後継者が決まっていなかった。そこで代理人として佐民が西郷を預かった所以である。牧家系図にも石千代が婚家に残した3名の幼子が牧仁泰（行年62歳）、牧仁哉（行年72歳）、牧真須源（行年91歳）として記載され、成長した様子がうかがわれる。しかし、牧家に残された3人の幼子たちも一瞬にして両親を失ったことになる。

江戸も終わりに近づいて、ひしひしと明治維新が近づいていたが、戸主権の強さは明治民法にも反映され続けた。

3. 龍家から田畑家、そして笠利家と時代を遡る

奄美大島で絶対的な力を有した龍家については、これまでの検証の中で散発的に提示してきたし、奄美大島歴史研究家たちによっても多くの検証がなされているので、にわか奄美史研究家の筆者が立ち入るスキはない。しかし、当事者として当事者の視点から物事を確かめていくことも必要であろう。図1では、主として田畑家本家を中心に次男家分家・三男家分家の系図を示しながら、筆者までの流れを説明した。次の段階は、田畑家から笠利家までの系図である（図9）。図9でも示したように田畑家は1785年（天明5年）に龍姓に改姓した。そして、田畑姓の前は笠利姓であったが、初代笠利為春（佐仁1482-1542）から代々続いた笠利家は、薩摩藩17代島津吉貴（1675-1747）の時代、1726年（享保11年）に田畑姓に改姓し、郷士格に取り上げられた。田畑家本家第12代田畑為辰（佐文仁1678-1764）の時代である。

図1からの流れを逆行して図9の下から示したのが田畑家本家第12代田畑為辰（佐文仁1678-1764）であり、佐文仁の時代に分家が認められ、次男家分家第12代田畑為治（佐富1681-1756）、三男分家家第12代田畑為遠（佐喜美 1684-1750）と田畑家の勢力が広がった。

まず、田畑家本家第12代田畑為辰（佐文仁）は龍郷を中心に灌漑・開墾・開拓事業に苦心してその成果を挙げた人物と評される。『大奄美史』⁴⁰⁾には龍佐運についての記述があるが、彼の別名は佐文仁と言い、1676年（延宝4年）に龍郷に生まれたとある。図12の田畑家系図を見ると龍佐運という人物は第18代に存在するが、彼は1808年（文化5年）に生まれているために該当しない。更に、佐文仁という人物は、12代の他に第13代田畑為弘（佐文仁1697-1762）、第14代田畑為長（佐文仁1739-1758）、第17代田畑為勝（佐文仁1773-1858）が存在するが、いずれも年代が合わない。『大奄美史』に記述されている龍佐運なる人物は、その業績及び生没が本家第12代田畑為辰（佐文仁）と一致している。ゆえに、田畑氏の報告『笠利氏家譜の解説』⁴¹⁾も含め、『大奄美史』に記述された龍佐運は、系図で示された田畑家本家第12代田畑為辰（佐文仁1678-1764）の事であろう。

伊賀倉俊貞著『校正鹿児島外史ノ五』⁴²⁾には、為朝の系図に鎮西大島太郎は為朝の正室の子で長男為頼（生没不詳）の子どもとして大島氏族、“琉佐文仁”の名前がある。同じく次男の為重（生没不詳）の子供で、鎮西二郎鹿児島士族、吉田次郎四郎が記されている。吉田次郎四郎はWEB上、吉田清孝（よしだ きよたか）の幼名であるとの検索結果がでる。彼は、安土桃山時代から江戸時代にかけての武将であり、島津氏の家臣として紹介されている⁴³⁾。また、琉佐文仁については、直接的には検索できず、佐文仁の名前からか田畑氏の系図に行き着く。ゆえに、『校正鹿児島外史巻ノ五』に記された琉佐文仁は、田畑佐文仁の事ではないかと考えられ、『大奄美史』の“龍佐運”なる人物と同一であると考えられる。しかし、同時に為朝の子孫であると称される琉球王国の俊天王（1166-1237）は、為朝の死亡は1170年（嘉応2年）であり、この死亡年から考えるとあり得る話ではある。しかし、島津家の家臣である吉田次郎四郎（吉田清孝 生没不詳）は安土桃山時代の人物とされ、大島氏族、“琉佐文仁”については生没不明であり、年代的に考えても為朝の長男の子供であるとの見解は疑わしい。為朝とその正室との間にできた子供たちの動向や、活動範囲などを知る手掛かりがもし、あったとして、“琉佐文仁”は初代とされる笠利家のそのまた、先の人物ではなかったかとも思える。ちなみに『校正鹿児島外史』は1885年（明治18年）に出版され、著者の伊賀倉俊貞は鹿児島士族と明記されており、薩摩藩公認の歴史家であり、第11代薩摩藩主島津斉彬（1809-1858）の命によって編纂した。ここでの琉（佐文仁が、第12代田畑為辰（佐文仁1678-1764）の事であるとは筆者には思えないが、実際、謎である。田畑氏の報告書によれば第12代

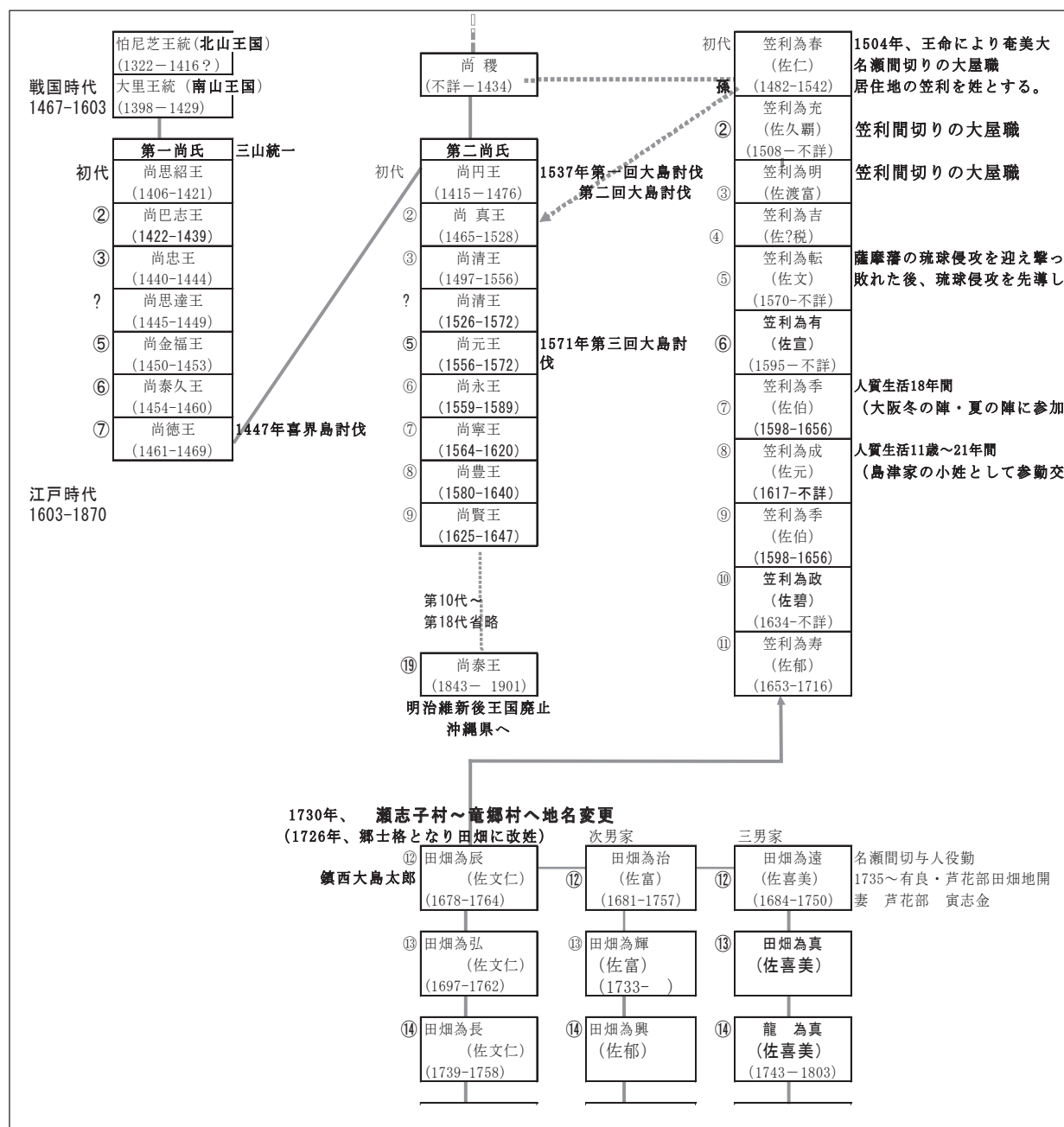


図9 笠利家から田畑家への系図(筆者作成)

田畑為辰(佐文仁)は、薩摩藩の指令によって、奄美大島の開拓・開墾の他、人馬力を使った精糖法を水車式に改良し、生産率の向上に尽くした。佐文仁が開拓した土地は13年間で3百町以上、石高にして1400石以上、次の13年間で合計494町歩以上に及んでいる。又、砂糖の増産のために、水力による水車式の製糖法を考え付き、推進した。

薩摩藩は佐文仁の功績によってその経済が大いに潤ったのである。次に佐文仁がなした大事業は龍郷町浦部落の海岸沿いに堤防を築き、海水の流入を防ぎ、隧道を築いて水の出入りを容易にしたものである。この場所は奄美大島の首に近いところ、太平洋と東シナ海が近接している場所であり、沿道には松が植えられ、“浦の橋立”と称されている(図10)。佐文仁の開墾事業の一環であったようだ。“浦の橋立”は空港から奄美市につながる国道沿いにあり、海の青さとのコラボで美しい風景となっている。250年以上も前のこの大事業は、現在の様に機械に頼った近代的な工法ではなく、人力に頼ったと思われるので、工事期間も含め、完成まで困難を極めたことであろう。日本三景には“天の橋立”“松島”“宮島”等が

あるが、ちょっと南の果てのこの“浦の橋立”も距離は300mほどで短いが見ごたえのある風景である。但し、現在は舗装されており、旧道の時より、松も少なく景観が損なわれているように感じられるのは筆者のみか。

最も、田畑氏によれば、佐文仁の業績として広く知られる灌漑・開拓事業は、弟たちの協力によるものであったと記載している。佐文仁に協力した弟たちは後に、次男家分家田畑為春（佐富）と三男家分家田畑為遠（佐喜美）に分家している。次男家、田畑為治（佐富1681-1757）は、父親の後を継いで名瀬間切りの与人役となるなど、命に従ってその勤めを果たした。三男家佐喜美が開墾に尽力した地は有良・芦花部地域であった。本家と次男家・三男家は分家をして相互に協力し合いながら、その家系を保った。

話を図9に元に戻すと本家第12代田畑為辰（佐文仁）及び次男家12代田畑為治（佐富）・三男家12代田



図10 浦の橋立（筆者撮影）



図11 行盛神社（戸口）筆者撮影



図12 行盛の墓（筆者撮影）

畑為遠（佐喜美）の父親は、第11代笠利為寿（佐郁1653-1716）である。彼は1662年（寛文2年）大嶋御代官他、大島、徳之島、喜界島などの用人司（財政関係の総括責任者）となり、その役割を果たした。1690年（元禄3年）に行盛神社を建立（図11,12）、1692年（元禄5年）今井権現宮（奄美の歴史深訪1で報告）を寄進した。更に為禱は生地瀬師子村を竜郷と改称することを申請し、1730年（享保15年）12代為辰（佐文仁）の時代に実現した⁴⁴⁾。ちなみに先述した龍郷方間切りには瀬師子村という地名は存在しない。

4. 笠利家から琉球王国、そして源為朝へ

ここでようやく笠利家に入るが、初代笠利為春（佐仁1482-1542）は、その“為”の字に象徴されるように、為朝の直系子孫とされ、琉球の尚稷王（生年不詳-1434）の孫だとも言われている。まず、図13の笠利家から琉球王国系図で示したように、琉球中山王舜天（1166-1237）は、為朝と天孫時代最後の寧王女との間にできた子どもの舜天を王位につけたとされる。

その血統はおおよそ200年間王国を保った。その後、英祖王統5代（1259-1349）続き、察度王統（中山王国）（1350-1405）、怕尼芝王統（北山王国）（1322-1416?）、そして大里王統（南山王国）（1398-1429）という三か国が統治した。これら3つの王国を統一したのは第一尚氏と呼ばれる初代尚思紹王（1406-1421）である。第一尚氏は第7代尚徳王（1461-1469）まで続き、つぎが第二尚氏と呼ばれる尚円王（1415-1476）が引き継いだ。この第二尚氏王統を創始した尚円王の父親が尚稷王（不詳-1434）であり、再び、為朝の血流が琉球王国の国王となった。

その尚稷王の孫が初代笠利為春（佐仁1482-1542）であると言われる。そうであるならば笠利家は琉球王国の血流であると同時に為朝の血流であるという事になる。しかしながら、為春が尚稷王の孫であるとするならば、どこかで初代尚円王あるいは二代尚真王とつながらなければならないが、尚稷王の孫であるとは記載されていない。

琉球王国の奄美大島への侵攻は英祖王統時代からであった。時は鎌倉時代、英祖王は1266年に奄美群島服属させ、王国からの按司を派遣させ、支配下に置いた。按司とは琉球王国における最高位の位階であり、主に王族から任じられ、地方行政区画である間切（まぎり）の領有が認められた。琉球王国の奄美支配は第二尚氏の時代にも引き継がれ、琉球王国の支配下で奄美大島は琉球王国の地方行政制度に基づいて、行政官が着任した。まず、第二代尚真王（1465-1528）の時代に王命によって初めて為春は、1504年（永正元年）に首里大屋職として奄美大島に赴任した。赴任先は名瀬間切（現在の奄美市名瀬）である。首里大屋職とは、いわゆる琉球王国国王の代理人である。次の第2代の当主笠利為充（佐渡富1508-不詳）は、瀬戸内東間切首里大屋職に、第3代笠利為明（佐渡富 生没不詳）は、笠利間切の首里大屋職に、第4代笠利為吉（佐俣税 生没不詳）は笠利間切りの大屋職と転々と場所を違えて任命された。

第5代笠利為転（佐文）（1570-不詳）は、笠利間切りの首里大屋職であったが、1609年（慶長14年）、12代島津義久（1533-1612）の琉球侵攻を奄美大島で迎え撃つも大敗北を喫した。その後、島津藩は琉球王国にも攻め入り、勝利を収めた。島津藩は奄美群島を割譲させ直轄地とし、琉球王国を属国とした。奄美大島は、その後、島津藩の直轄領となり支配下に組み込まれた。島津家は後に薩摩藩として所領を拡大していくが、初代島津忠久（1179-1227）は、源平合戦後の1185年（文治1年）に、公家五摂家のひとつ近衛家領島津荘の下司職に任じられている。彼は、鎌倉幕府成立後には源頼朝（1147-1199）より薩摩国・大隅国・日向国の3国の他、初期には越前国守護にも任じられ、鎌倉幕府有力御家人の中でも異例の4ヶ国を有する守護職に任じられた家柄であった。忠久は頼朝と鎌倉幕府の有力御家人であった比企能員（不詳-1203）の妹丹後局（丹後内侍）の子とも言われている。その12代島津義久の琉球侵攻を奄美大島で迎え撃ち大敗北を喫した為転は家督を奪われることなく一族に家督を継がせることができた。1623年（元和9年）に島津家家臣島津久元（1581-1643）他4名連署による“大島置目之条々”という通達がなされ、奄美の支配についての取り決めに従うことになった。

1613年（慶長18年）島津藩は初めて奄美大島に代官法元仁右衛門を派遣して大島支配を強め、笠利家の弱体化を図った。この頃の行政区割りは、琉球王国時代の行政区割りになっていたと考えられる。その区割りでは、赤木名方、笠利方、瀬名方、古見方、名瀬方、龍郷方、住用方、東方含め13間切りであった⁴⁵⁾。法元は最初、本拠地を名瀬村大熊（名瀬方）に置いたが、次の年には笠利町赤木名（赤木名方）に変更、何故か龍郷方を避けてこれを何回か繰り返して最終的に名瀬方伊津部村を大島統治の中枢にした⁴⁶⁾。大熊の隣地域である有良を含む龍郷方には龍郷村や久場村が含まれ、この地域に笠利氏は居住していたと考えられる。これは筆者の推測であるが、島津藩から派遣された法元は、龍郷方により近い隣接区域の大熊や赤木名に本拠地を置き、笠利氏の動向を監視していたのではないかと考える。笠利氏は家督を奪われることはなく従来の地位が保全されたが、以降、本領への参勤や一族の一定期間の薩摩在住が義務付けられるなどの服属を強いられた。

第7代・第9代の家督を継いだ笠利為季（佐伯（1598-1656）は、12歳から30歳までの間、人質生活を送った。人質というのは国交上の必要に応じて要求されるもので、人質に選ばれるのは王子など有力者の子弟である。その人物は必然的に将来の指導階級となるだけに、これを厚遇して好印象を持たせる、あるいは文化・環境に適応させることでその力を貶める効果があった。ゆえに保護国側にとっても重要な事であった。図14は20年に及んで薩摩藩の人質になった第7代・第9代笠利為季佐伯（1598-1656）を偲んで設立された“笠利為季の碑”である。

為季は、人質生活の間に起きた大阪夏の陣と、冬の陣に島津家の一員として琉球勢を率いて参戦した。大坂冬の陣・夏の陣は、“関ヶ原の戦い”の勝利によって江戸幕府の征夷大將軍となった徳川家康（1543-1616）が、大坂城を拠点とする豊臣秀頼（1593-1615）を滅ぼした戦いである。1614年（慶長19年）の戦いを大坂冬の陣、1615年（元和元年）の戦いを大坂夏の陣と言う。“関ヶ原の戦い”は、1600年（慶長5年）に関ヶ原町を舞台に、徳川家康率いる東軍と石田三成（1560-1600）率いる西軍が死闘を繰り広げた戦いであり、“天下分け目の戦い”とも呼ばれた。この闘いは家康側の勝利に終わったが、この関ヶ原の

戦いで第17代島津義弘（1535-1619）が、豊臣方として参戦した為、第18代島津忠恒（1576-1638）は徳川家康に謝罪のため上洛、途上、駿府で家康に、江戸城にて徳川秀忠（1579-1632）に謁見した。忠恒は、家康から家久の名前と琉球の支配権を承認されたほか、初代薩摩藩主となった。8代当主笠利為成（1719-不詳）も為季と入れ替えに人質となり、初代藩主島津家久の小姓として参勤交代に供奉した⁴⁷⁾。第11代笠利為寿（佐郁1653-1716）が1692年（元禄5年）に第3代藩主・島津綱貴（1650-1704）を表敬訪問した直後に、家老・新納喜右衛門久行（にいな ひさゆき）が送付した丁重な礼状（元禄5年（1692年）10月5日付）が現存しており、その文面からも笠利氏が特別な地位を有していたことが確認できる⁴⁸⁾。しかし、その地位保全は第11代笠利為寿までである。薩摩藩は統治下の奄美大島の支配に深く関与し続けた。1726年（享保11年）に薩摩への貢献（砂糖増産のための新田開発）を主な理由として笠利姓から田畑姓を与えられ、第12代からは田畑為辰（佐文仁 1678-1764）として郷土格になったとされる。

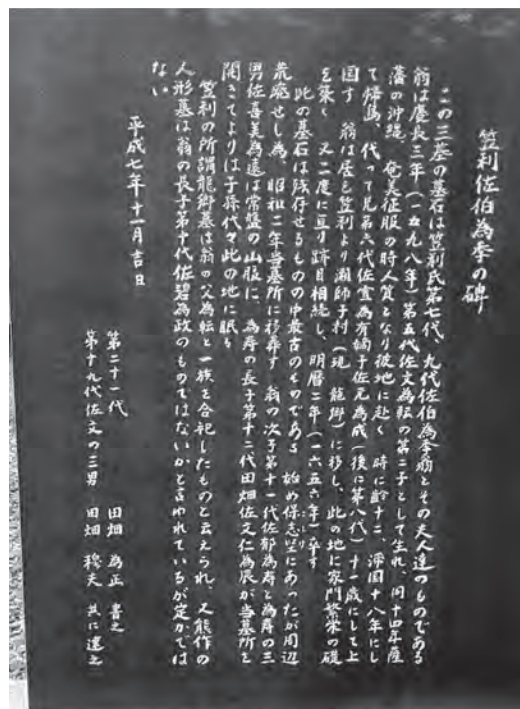


図14 笠利為季（佐伯）の碑

郷土（ごうし）とは、江戸時代の武士階級（士分）の下級武士に属した人々を指し、武士の身分のまま農業に従事した者や、武士の待遇を受けた農民を指し、苗字帯刀が許された者達である。元はと言えば笠利家は島津藩の人質となるほどに重要な琉球王国国王の代理人であったわけだから、笠利家が薩摩藩の郷土格になったという事は実質格下げである。ゆえに 格別に喜ぶべきことではないと思われるが。この時、田畑為辰（佐文仁）は薩摩藩から、奄美の新田開発、開墾や砂糖の増産等の役割が与えられた。その業績については先述した。

笠利家から田畑家系図等によると、笠利家は本祖の為春以降、通字に“為”を使い続け、先述した為

図15 田畑家家紋⁴⁹⁾

図16 田畑家代紋

朝とのつながりを強く意識していたようである。また、400年以上も前から存在する田畑家の墓石の家紋には、清和源氏系の武家に多く見られる意匠丸に一文字（横の棒線が丸枠を左右に突き出す）の家紋（図15）が使用されており、為朝の子孫との伝承に由来するものであると説明されている。田畑家系図関係の報告書では、田畑家の家紋は他に“丸の内に二つ引き”（図16）がある。引両紋の線は“龍（竜）”をあらわし、1本の線は1匹の竜、2本の線は2匹の竜が天に昇る（天下を取る）ことを意味する。WEBによれば「二つ引き」は足利將軍家の家紋として有名だそうである⁵⁰⁾。尚、現在進行中であるNHK大河ドラマの今川家にも同じような家紋のついた旗が掲げられていた。これは今川家が足利一門であることゆえだそうだ。為朝の嫡流とされる田畑家の家紋がなぜに足利一門の家紋なのかもまたもや疑問が生

じる。

■ おわりに

本論では、大江氏の著作を手掛かりに、江戸末期に起きた事件から、筆者の母方の祖母芋千代とその先祖であろう者たちの系譜を国会図書館に所蔵されている『奄美郷土研究会会報』にその根拠を得て、筆者と龍家、そして龍家から田畑家、そして笠利家から琉球王国、そして琉球王国と源為朝と家系図を作成しつつ、1000年の時を逆行し現在に至る過程について部分的に検証した。

まず、田畑家から龍家の家系図を作成して、考えたことは、笠利家が薩摩藩の支配を受けながらも、よくも21代（約500年間）までその家系が続いたという事である。そこには本家と分家の系図の中で、姻戚関係で相互にその系図を維持したことと、郷土格を得ている龍家がいかに厳格な士族としての意地を有していたかという事である。次に田畑家と牧家の争いから、筆者との系図が明確になったが、何故に死ななければならなかったとか、けんかの原因がわからないだけに不条理な結果であったと考えられた。そして、田畑家はその前の笠利家につながるが、琉球王国支配下の奄美大島と薩摩との関係がある程度理解できた。

考えるに、現在、ウクライナで起きているロシアの侵略戦争も含め、他国が攻め入るという事の悲惨さを味わった奄美大島も、そして武士としての意地を貫き通した武士道としての切腹も、決して幼い子たちには良い影響を及ぼさない。時代が、武士社会から脱却して新しく文明社会に開花していく中で、取り残された士族の喘ぎが聞こえるように感じられたのは筆者だけか。維新政府は士族に対して新たに警察機構を構築して民衆の警護にあたらせたが、彼らには決して、武士社会のような特権は与えられなかったであろう。士族龍家の終焉もそこにあるかと考えた。次男家家系図の末端に表記される茂太郎も警察官になったようであるが、武士社会ほどには特権は与えられなかったであろう。

最後に田畑勇弘氏の資料にはまことに感服した。勇弘氏は17代為勝の四男龍為行（佐民）と石千代との間にできた子女の一人折鶴が彼の母親である。従って、勇弘氏は龍為行の孫であり、本家系図の一人としてその名前が記載されている。龍為行（佐民）の兄が龍為時（佐元）が母方の祖母の祖父にあたることから、田畑勇弘と筆者は少なからず姻戚関係にはなる。

最後に、父方の系図についてもわからないことだらけで、最初の疑問の一つも解決できていない。家紋という事であるならば、ちなみにJALがロゴマークにしている鶴丸は鶴一羽であるが、実家榮原の家紋は稀に見る丸に向鶴である。興味深いのは、田畑氏の報告⁵¹⁾に1522年（大永2年）に琉球王国より派遣された喜姓喜統親方の禰当磨（いのりとうま）氏は、田畑氏と婚姻を結びながら、岡家、岡林家、大島家、岡江家等に分岐し、本家の支流として泉二家や榮家等があるとされる。親方とは琉球王国から派遣された長官の事らしい。泉二家の新熊（1876-1947）は日本の有名な刑法学者であり、WEB検索で容易にその名前を発見することができる。しかし、他方の榮当重（東京在住）は弁護士と説明されているのみでその系図がわからない。元をただせば、同じ血流かもしれないが、喜姓喜統親方の禰当磨氏を含めて検証する必要がある。いずれにしても榮家は奄美大島で一番多い姓であり、特に奄美市に多いという。田畑氏が何を根拠としたのか改めて検証することとする。そのことによって筆者の奄美史探訪（2）に書いた三味線の出自も出てくるかも知れない。

参考・引用文献

- 1) 島尾敏雄編、田畑勇弘著：笠利家家譜の解説第三篇、奄美の文化・総合的研究、pp75、法政大学出版会、1976年。
- 2) 佐々木秀美著：平家落人と源為朝伝説の島ー奄美大島歴史深訪（1）、看護学統合研究、Vol24, No1, pp47-55、2022年。
- 3) 佐々木秀美著：奄美大島歴史深訪（2）ー島民を苦悩させたサトウキビと家人（ヤンチュ）制度、そしてケンムン伝説ー、看護統合研究投稿中、2022年。

- 4) 笠利水也著奄美史の一断面 奄美笠利氏の系譜, 千秋社, 1978年.
- 5) 田畑千秋: 奄美の暮らしと儀礼, 第一書房, 1992年.
- 6) 田畑千秋: 奄美・沖縄女のことわざ, 第一書房, 1997年.
- 7) 田畑勇弘著: 笠利氏家譜 (三) 次男家, 奄美郷土研究会会報六号, pp1-23, 1964年.
- 8) 大江修三著: 明治維新のカギは奄美の砂糖にあり, 薩摩藩隠された金脈, p 48, スキー・メディアワークス, 2010年.
- 9) <https://ja.wikipedia.org>
- 10) 大江修三著: 前掲書 8), p48.
- 11) 田畑勇弘著: 笠利氏家譜の解説, 奄美郷土研究会会報三号, pp29-58, 1961年.
- 12) 山下文武著: 笠利氏家譜 (一), 奄美郷土研究会会報仁号, pp53-54, 1959年.
- 13) 山下文武著: 笠利氏家譜 (二), 奄美郷土研究会会報三号, pp89-62, 1961年.
- 14) 田畑勇弘著: 笠利氏家譜, 奄美郷土研究会会報四号, pp38-45, 1962年.
- 15) 田畑勇弘著: 笠利氏家譜 (二), 奄美郷土研究会会報五号, pp64-88, 1963年.
- 16) 田畑勇弘著: 笠利氏家譜 (四) 三男家, 奄美郷土研究会会報八号, pp84-95, 1966年.
- 17) 田畑勇弘著: 笠利氏家譜, 奄美郷土研究会会報九号, pp48-70, 1967年.
- 18) 田畑勇弘著: 笠利氏家譜後白譜, 奄美郷土研究会会報十号, pp14-19, 1968年.
- 19) 田畑勇弘著: 前掲書11)
- 20) 田畑勇弘著: 前掲書11)
- 21) 亀井勝弘著: 政家・牧家系図, 奄美郷土研究会会報十九号, pp73-86, 1979年.
- 22) 田畑勇弘著: 前掲書11)
- 23) 田畑勇弘著: 前掲書11)
- 24) 福山ゆうき編: 芦花部誌, p184, 玉流竜教育図書印刷, 1970年.
- 25) 佐々木秀美著: 前掲書 2).
- 26) 横山ゆうき編: 前掲書24), pp183-196.
- 27) 求哲次: 奄美シマジマ (村々) の暮らしー名瀬市有良を中心にー, 広報社, 2007年.
- 28) 田畑勇弘著: 前掲書11)
- 29) 求哲次: 前掲書27)
- 30) 求哲次: 前掲書27), p110.
- 31) 田畑勇弘著: 前掲書 7), pp1-23.
- 32) 田畑勇弘著: 前掲書 7)
- 33) 佐々木秀美著: 前掲書 2)
- 34) 田畑勇弘著: 前掲書16)
- 35) 平和人著: 大島の士族誕生記, 奄美郷土研究会会報十九号, pp73-86, 1979年.
- 36) 大江修三著: 前掲書 8), p 47.
- 37) 田畑勇弘著: 前掲書11), pp64-88.
- 38) 亀井勝弘著: 前掲書21)
- 39) 昇曙夢著: 西郷隆盛獄中記, 新人物往来社, 1977年.
- 40) 昇曙夢著: 大奄美史, p285, 南方新社, 1949年.
- 41) 田畑勇弘著: 前掲書11)
- 42) 伊賀倉俊貞著: 校正鹿児島外史卷ノ五, 清弘堂, 1885年.
- 43) <https://ja.wikipedia.org>
- 44) 田畑勇弘著: 前掲書11)
- 45) 昇曙夢著: 前掲書40), p120
- 46) 昇曙夢著: 前掲書40), p248
- 47) 大江修三著: 前掲書 8), p40
- 48) 大江修三著: 前掲書 8), pp136-139.

- 49) 田畑勇弘著：前掲書11)
- 50) <http://www.natubunko.net>
- 51) 田畑勇弘著：前掲書11)
- 52) 森崎一貴，近江俊秀著：境界の日本史，朝日新聞出版，2019年.